

八重山地方の祭祀と芸能

—西表島祖納の節（シチ）祭—

磯部二郎 教養学部芸術学科音楽学課程教授

[プロジェクト報告]

Festivals and Folk Entertainments of Yaeyama Islands in Okinawa: Centering around the *Shichi* festival of *Sonai* village on *Iriomote* Island

Jiro ISOBE

Professor, Department of Arts-Music, School of Humanities and Culture, Tokai University

The *Shichi* festival is *Iriomote* Island's biggest festival, which is celebrated for three days in June or July according to the lunar calendar. In the festival, people pray for an abundant harvest in the next season and greet a visit by *Miriku* (an indigenous god) from eternity. Owing to the varieties of dedicatory songs and dances performed by villagers and concomitant religious peculiarities, this festival has attracted the continuous attention of students and scholars in this field. Reviewing several reports and a video clip of the *Shichi* festival in *Sonai* village published or released in the past two decades, I noticed some differences among their component parts. It is still an open question whether the tradition has changed to some extent in the course of years. This short article is the first step to investigate such differences, and so further research and fieldwork would be indispensable to the clarification of the present situation and related problems.

Accepted, Dec. 3, 2013

I

節（シチ）とは、八重山諸島の各地で行われる、新年にあたり五穀豊穰と豊年を祈願する祭祀である。旧暦の7月、8月の己亥（つちのとい）の日から、多くは3日間かけて行われる。1713年、首里王府の手によって編纂された『琉球国由来記』の第21巻、八重山島の「年中祭祀」にも節の記述がある¹。そこにあるように当初は、旧暦の7、8月の己亥の日に行われていたが、近年は1ヶ月ずれて8・9月の己亥の日が選ばれている。

海の彼方から豊穰神、来訪神を呼び寄せる祭祀だが、地方毎に内容の違いが見られる。舟こぎを中心とするもの（波照間島、新城島、西表島祖納〔干立も同様〕）と、仮装した神のマユンガナシの来訪を中心とするもの（石垣島川平、伊原間、平久保など）に大別される。祖納の節祭は、この地区の年中行事の中で最大の祭祀である。祖納は西表で最も古い歴史を持つムラでもあるので、祖納の節祭は西表を代表する祭祀といっても過言では無い。この祭祀の実施内容については、既にいくつかの報告がある。残念ながら筆者はまだこの

祭祀に立ち会う機会を得ていないので、これらの先行研究を参考に、各報告間の異同を確認しながら、この祭祀の特徴と、八重山の祭祀研究における節祭の意義について考えてみたい。

今回この祭祀の内容について参照した主な資料は次のものである。

資料1)『日本民謡大観（沖縄奄美）八重山諸島篇』日本放送協会、1989

八重山地方の民謡の歌譜を収録した貴重な一次資料である。pp.231～251にかけて各地の節祭の歌が収録されているが、歌譜に先立って祖納の節祭について簡潔にまとめられている。この部分の内容は、石垣博考氏による「西表島祖納のシチ（節祭）」²に基づくとされている。

資料2)比嘉康雄『神々の古層⑨ 世を漕ぎ寄せる〔シチ・西表島〕』ニライ社、1991

解説付き写真集で、節祭の準備から終了までの展開を追った具体的な記述が付く。祭の期日については明示されていないが、解説中に「1989年度」という語もあるので、この年の記録を基にしたものと推測される。ただ写真には、この年以外のものも含まれることから、祭祀の説明は集約された内容かも知れない。

資料3)武藤美也子、宮井由未子「西表島祖納のシチ

原稿受理日：2013年12月3日

(1990年調査)『沖縄祭祀の研究』翰林書房, 1994, pp.85-112

1990(平成2)年旧暦の10月14日から3日間(新暦11月30日から12月2日)の節祭の記録が詳細に報告されている。これは10月の己亥の日で、例年より60日遅く行われたという。今回の資料の中では、関連する神事の記録もあり、学問的に最も価値ある資料といえる。

資料4)「しち節祭」沖縄県西表島祖納(映像資料), Switch

西表の節祭は1991(平成3)年2月21日、文化庁より重要無形文化財の指定を受けた。それを受けて、2005(平成17)年11月11日、旧暦9月己亥の吉日から挙行された節祭の様子が、西表民族芸能保存会や竹富町教育委員会などの協力で映像化された。そのDVD版である。

II

前節の資料の中で、最新の情報を伝える資料4)を中心に、節祭の経過を辿ることとする。ただ、映像は祭祀の一部が切り取られたものに過ぎないので、必要に応じて他の資料を参照していくこととする。

<第1日>己亥(つちのとい)

トヌユ(年の晩:大晦日)と呼ばれ、スリズと称する公民館にて準備作業や、ウブシクミ(大仕組)と呼ばれるリハーサルが、祭りの順序に従って行われる³。

その他の準備として稲、粟、五穀が供え物として奉納され旗頭などが準備される。一方、前泊浜のフナムトゥ(舟元)では、ゴザ(御座)が用意され、海の中にフナクイ(舟漕ぎ)の目印になるミンギ(道木)が立てられる。浜に舟が準備されると、それに酒、米、ウサイ(ご馳走)などの供え物が添えられ、ユークイ舟への祈願、舟頭への酒のふるまいなどが行われる。裏方の女性達が神前の供え物の料理を準備する。ウブシクミは夜遅くまで行われる。

<第2日>庚子(かのえね)

盛大にユークイ(世乞い)行事が執り行われる⁴。この日が、新年の元旦にあたる。ユークイとは、五穀豊穡の世(ユ)を迎え、様々な奉納芸能や馳走でもてなす、節の中心となる行事である。早朝より村の中心的なウガン(御嶽)での神事とスリズから浜へ出たの祭祀が並行して、相互に関係しながら進められる⁵。

早朝、スリズでドラの音によって祭りが告知されると、カシラウクシ(旗頭起こし)に入る。尊農、五穀豊穡と書かれた1番旗頭(ガヒャーガシラ)、祖納、豊年の文字の2番旗頭(シバガキガシラ)、最後にナギナタを付けた3番旗頭(ナギナタ旗頭)が起こされる。

開会の儀式が済むと、1番旗が浜に向けて出発する。終始ドラの音が打たれる中、前泊浜のフナムトゥに運ばれ、立てられる。前泊ウガンで、舟頭2人と旗振が、持参した供え物を供し、神司によって神への祈願がなされる。ミリクユをこぎ寄せる杯が交わされ、舟頭たちは全力を尽くすことを誓う⁶。

一方スリズでは、ミリク起こしの儀式が始まり、ミリク役の男性にミリクの面がつけられる。ミリク役は、49歳の年男から選ばれることになっている。そして2番旗とミリクが出発する。ミリクは左手に杖、右手で日の丸の描かれた瓢箪型の内輪を、招くように大きく振りながら、お供と一緒に進んでいく。太鼓、三線、笛役は《ミリク(弥勒)節》を演奏しながら進んでいく。

最後に3番旗(ナギナタ旗頭)に続いて、アンガー行列、フダチミ(花嫁)⁷が行進する。花嫁行列とも呼ばれ、《ユナハ(与那覇)節》で行進していく。

前泊浜では、2番旗が到着するころ、舟頭らが前泊ウガンから帰り、ユークイの儀式が始まる。旗を立てられると、ミリクも浜に到着し、椅子に着座する。その間、終始内輪を大きく仰ぎ続ける。

舟頭、舟子が入場し、「舟浮かべ」の歌が歌われる中で、舟が海に下ろされる。それに続いて、ヤフヌティ(櫂の手)の踊り(武芸)が演じられる⁸。ミリク行列、アンガマ行列が入場し、フナムトゥに入る。

開会の辞に続いて、《ミリク節》を伴奏に御座でミリクの舞が踊られる。ミリクが内輪を振りユークイを迎える。続いて、《祖納嶽節》(古典舞踊)、《まるまぼんさん節》、《西表口説》、《波照間口説》、《高那節》など、ミリクを前に奉納舞踊が披露される⁹。

浜では、キョングン(狂言)¹⁰、棒芸(「二人棒」、鎌と棒の「ガヒャー棒」)、婦人アンガー踊りが続く。このアンガー踊りは二重に円を作り、それぞれ逆方向に進みながら《今日ヌフクラシャ》、《五尺手拭》、《船》、《ググハ(鳥羽)》を歌い踊る¹¹。

続いてユークイの見せ場である舟クイ(舟漕ぎ)に入る。

舟頭らは抽選で選ばれた舟にマスサイ（花米、塩）をまき、舟子と舟を清め、舟乗り祈願歌などを供する。両舟は、沖に出て競争の態勢が整うまでゆったりと櫂を上下に操りながら、「舟ヌジラー」（乗舟祈願歌）を歌う。合図と共にアムリソーヤ（石）に向けて回り、ミンギを回って戻ってくる。二度目は、沖の「まるまぼんさん」という島を回って帰ってくる¹²。

舟クイの間、アングー達や祭りの参加者は浜に出て、ガリーを踊る。ガリーは、手のひらを下にして、手首を曲げる動作を繰り返すもので、ユーを招き寄せる動作ともいわれる。舟クイが終わり、舟が浜に着くと、舟頭は舟元の御座に駆け上がり、チカから杯を受ける¹³。先に杯を受けた方が勝ちとなる。その時、舟子の前乗りは、パチカイ（早使い）という口上を奉じる。

《ミルク節》に合わせて「ミルクの舞」が踊られた後、舟子達が櫂を肩に、旗頭を回りながら歌う男子アングー踊りが続く。曲は、婦人アングー踊りと同様だが、《五尺手拭》は外されている。獅子（雄と雌）が舞い、神御酒が獅子にふるまわれるとユークイ行事の終わりとなる。

閉会の辞が述べられると、《ミルク節》にて一同は舟元からスリズへと、来た通りの順で戻る。スリズに戻ると、ミルク役は、仮面を取り、神から人へと戻る。スリズでのユークイトウドゥミ（止留）を全員で済ませる。続いて、ブガリノウシという酒宴がスリズで行われる¹⁴。

<3日目>辛丑（かのとうし）

第3日はトウドゥミの日で、村で最も古いとされるカー（井戸）のウヒラカー（大平井戸）の清掃と部落内、家々の井戸の清掃が行われる。

ミルク役の家に公民館長、舟頭らが酒と料理を持参し仏壇に香を上げ礼拝する。前日の衣装で、ウヒラカーの横に旗頭を立て、公民館長らがカーに供え物をして祈願する。ドラの合図でガリーが踊られる。水の神へ奉納舞踊が再現され、「ウブカー（産井）」に感謝すると共に、カーを清める。その後、旗頭を先頭にムラ人は家々を回り、ムラ中を清めていく（ムラ清め）。各家では酒を用意し行列を迎える。小中学校や保育所なども含まれる。子供達の芸も披露され、新しい年を迎える気持ちが表現される。スリズでは、トウドゥミの儀式がなされる。ユークイの儀式で披露された奉納芸が改めて繰り返される。総監督、公民館長などの胴上げが行われ、役職が解任される。五穀豊穡のユーを迎え、無事に3日間の節祭

を終えることのできた喜びを、ムラ人はガリーを踊りながら、身体全体で表現する。

III

今回の資料比較から明らかになった相違点の中で特に重要と思われるものとして、ミルクと関わる問題がある。一つは、前述した閉会式近くの「ミルクの舞」の位置の問題である。果たして式の前後のどちらなのか。映像は編集も有り得るので断定はできないが、祭の最後を飾る《ミルク節》は閉会式の前に置かれていた。それが間違いないのであれば、閉会式後とする資料3)との違いが問題となる。また、このいわば結びの《ミルク節》の歌詞も問題である。というのは、資料3)では《ミルク節》の歌詞にA、B2種類あることが指摘されている。Aの歌詞では、今年の豊穡に感謝し、来る年の豊穡と幸福を祈念している。それに対しBは、「思ったことも願ったことも叶った。願い所から帰りましょう。」という内容で、「神送りをし、祭祀の終了を告げている」。前者は、ミルクの舟元への入場、開会後の舞と共に歌われ、後者は、その位置はともかく、閉会式にふさわしい趣旨によって、この祭りを締め括る。ところが、平成17年の映像資料であるが、筆者が聴く限りでは、スリズへ戻る行列の場面も含めて、「ミルク舞」が踊られるところでは全て、前者の歌詞で歌われているように思える。映像は断片的なので、確実なことはいえないが、もしそうであれば、資料3)でも述べられている「神迎え→神遊び→神送り」というこの祭祀の一連の流れが、損なわれることにもなりかねない。この点の確認も、当然ながら現地調査を踏まえた上でないと真偽は問えないが、節の伝承について検討する上での着眼点の一つになるかと思う。

節という祭祀の中には、様々な要素が盛り込まれている。今回はあまり触れられなかったが、神事としての要素、舞踊、民謡、演劇的要素など、実に多彩である。そしてそこに、ミルクという来訪神と「弥勒」との習合の問題も加わる。生活習慣の変化や過疎化などからも、節祭も変容を余儀なくされているが、祖納の人々のこの祭祀にかける思いは強く、ガリーで一体となって踊る人々の姿からは、この祭祀がムラ人をつなぐ重要な心の絆として機能していることが見て取れる。ここからも、他のどこの地域よりも、沖縄の祭祀芸能が豊かな歴史と働きを備える理由が窺えるのである。

注

- 1 外間守善, 波照間永吉編『定本琉球国由来記』角川書店, 平成9年, p.499
- 2 石垣博考「西表島祖納のシィチィ(節祭)」『八重山文化第2号』東京・八重山文化研究所 1974
- 3 各家では, 屋敷の内外で清掃が行われる。ザランゲーと呼ばれる小石が台所, 廊下, 玄関, 屋根の上などに撒かれ, 門のところで魔除けの意味を込めて, 一直線に並べられる。またシチカツァーという蔓草が, 家の中柱, 家具などに結ばれる。
- 4 昔は, 一番ドラの合図と共に, ウラヒカーから水を汲み, それを若返りの水として利用した風習についての言及がある。しかし, 既に資料3)(1990年)の時点でもそれが見られなくなってきたと記されている。
- 5 祖納の聖地はウガンと呼ばれ, 1990年の時点では6つ存在したとされている。すなわち, オハタキウガン(大竹御嶽)は祖納村創設者祖納堂儀佐の根所(島の元となる所)で, 祖納の神事の中心的なウガンであった。ケダグスクウガン(慶田城御嶽)は, 慶来慶田城用緒を祀る。慶来慶田城家は, 外離の野底からの移住者で, 17世紀後半には祖納に慶田城村が隣り合って置かれることになったという。その他, クシムリウガン, ウブウガン(西泊御嶽), パナリウガン(離御嶽), マエドマリウガン(前泊御嶽)があった。ウガンには, 神人として女性のチカサ(司)と補佐役であるチヂィビ(チカサと姉弟関係にある男性)がいるが, 当時マエドマリウガンとクシムリウガン以外のウガンにはチカサが不在であった。資料3)に記録された祭祀においては, マエドマリウガンとクシムリウガンのみで関連行事が執り行われ, 1989年度も同様であったが, これは先のチカサの不在のためと思われる。
- 6 以前はこの参拝の儀式はオハタキウガンで行われていたという(資料1), 2)). 従って, その儀式からスリズに舟頭達が戻るのを待って, 1番旗は前泊浜に行進したことになる。
- 7 クバ笠を被り, その上から黒い布を前身が覆われる程に被った女性。フダチミは慶来慶田城の娘が関係する物語に由来があるが, 物語の内容には諸説ある。
- 8 ヤフヌティは舟こぎを儀式化した踊り。櫂を正眼に構える動作が攻撃を表し, 櫂を両手で頭上に挙げる動作が, 年貢を捧げる意味ともいわれる。後者は, 攻撃に対する受け, という見方もあるようだ。
- 9 開会式前の奉納舞踊について, 資料2)では, 《祖納嶽節》, 《まるまぼんさん節》, 《西表口節》が, 資料3)では, 《ヨナハ節》, 《ヤラヨー節》のみが記されているので, 近年になって演目が追加されているのかも知れない。
- 10 男性による「リッポー(牛狂言)」「ルッポー(馬狂言)」など。
- 11 資料2)より。映像資料からは演目までは特定できなかった。
- 12 一度目の舟漕ぎは, 儀式漕と呼ばれる祈願の舟漕ぎで, 2度目が競争となるとされる(資料3)が, 映像では既に一度目に競漕が始まっている。
- 13 映像では舟頭らが前泊ウガンに参拝し, ユーを漕ぎ寄せた報告をし, チカから杯を受けると解説されているが, このことから舟頭より前にチカからは前泊ウガンに戻っていることが予想される。
- 14 開会式前の「ミルクの舞」については, 映像以外の資料には確認できない。資料3)には, 閉会式後に「ミルク舞」が記録されている。また, 資料2), 3)共, スリズに帰還後に《ミリク節》に合わせて「ミリクの舞」が披露される(ミリク納め)と記されている。